

8 課

11月19日

新約聖書の希望



安息日午後 11月12日

暗唱聖句

その証しとは、神が永遠の命をわたしたちに与えられたこと、そして、この命が御子の内にあるということです。御子と結ばれている人にはこの命があり、神の子と結ばれていない人にはこの命がありません。(1ヨハネ5:11、12、新共同訳)

そのあかしとは、神が永遠のいのちをわたしたちに賜わり、かつ、そのいのちが御子のうちにあるということである。御子を持つ者はいのちを持ち、神の御子を持たない者はいのちを持っていない。(1ヨハネ5:11、12、口語訳)

今週の聖句

1コリント15:12~19、ヨハネ14:1~3、ヨハネ6:26~51、
1テサロニケ4:13~18、1コリント15:51~55

今週のテーマ

ギリシア語で書いているとはいえ、新約聖書の著者は(ルカを除いて)みなユダヤ人です。そして彼らはもちろん、人間の性質をギリシアの異教思想によらず、ヘブライの全人的視点から捉えています。

ですから、キリストと使徒たちにとって、キリスト者の希望は新しい希望ではなく、むしろ、すでに父祖たちと預言者たちによって育まれた古代の希望の表明でもありました。例えば、キリストは、アブラハムが「わたしの日」(ヨハ8:56)を予見して喜んだことに触れ、ユダは、エノクが再臨について預言した(ユダ14、15)ことを記しています。さらに、ヘブライ人への手紙は、現代に生きる私たちが報いを受けるまでは受けることのない天の報いを望んだ信仰の勇者たちについて述べています(ヘブ11:39、40)。この記述は、もし彼らの魂がすでに天で主と共にいるなら意味のないものになるでしょう。

キリストにある者たちだけが永遠の命を持つこと(1ヨハ5:11、12)を強調することによって、ヨハネは靈魂の無条件の不死説を論破しています。キリストとの交わりから離れれば永遠の命はありません。ですから、新約の希望はキリスト中心の希望であり、この死ぬべき存在がいつの日か不死の存在になるという唯一の希望なのです。

たとえ神や永遠の希望を信じていても、私たちは、人生は厳しいことを知っています。しかし、この短く、問題の多い人生の向こうに何の希望も持たない人々にとって、それがどれほど困難なものであるか想像してみてください。私たちは皆、死ぬだけでなく、自分が死ぬことを自覚して生きており、複数の世俗的な作家は、人間の存在の無意味さについて言及しています。さらに、この理解が人生の営み全体を左右します。人生はしばしば厳しく、人生そのものが悲しみであり、悲しみに満ち、無意味で空虚に思えます。ある思想家は、人間とは、「崩壊しつつある骨に着せられた醜い肉の塊にすぎない」と言います。

もちろん、これらの思想と違って、私たちには、聖書の示すイエスにある永遠の命の約束があります。イエスにあるこの希望とイエスの死と復活が私たちにもたらすものが何かを知ることが、鍵なのです。そうでなければ、私たちにどんな希望があるでしょうか。

問1 1コリント15:12~19を読んでください。キリストの復活と私たちの復活の希望がどれほど密接に関係していますか。

パウロは明確に、私たちの復活はキリストの復活と切り離すことのできないものであると言います。もし私たちがよみがえらないのなら、それはキリストもよみがえらなかつたし、もしキリストがよみがえらなかつたのなら、「あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もお罪の中にあることとなります」(1コリ15:17)。言い換えれば、私たちの死は永遠の死を意味することとなり、すべては無意味だということです。パウロはさらに、「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ明日は死ぬ身ではないか」(同15:32)とまで言います。

もし炭素を素材とする原形質から成る私たちの現在の存在が私たちのすべてでとしたら、「70歳が寿命」であり(タバコを吸わず、マクドナルドのハンバーガーを食べすぎないなら、幸運にもより長く)、私たちのすべてなのです。なんとも厳しい現実です。エレン・G・ホワイトは次のように付け加えます。「天国は私たちのすべてであり、天国を失うことはすべてを失うことである」(『神の息子・娘たち』——『今日の光』2018年12月8日)。

私たちの希望と信仰がどれほど貴いものであるか考えてください。それを守るために、なぜ私たちは神の恵みによってできる限りのことをすべきなのでしょうか。

問2 ヨハネ 14:1~3 を読んでください。イエスが「またくる」(口語訳)と約束されてすでに 2000 年が経ちました。これほどの長い時を経ても、この約束は私たちの世代にも意味があることを、どのようにして他の人に理解してもらうことができるでしょうか。

黙示録の中でイエスは、四度「わたしは、すぐに来る」(黙3:11、同22:7、12、20)と言われました。イエスがまもなくおいでになるとの期待が、幾世紀にわたって使徒時代の教会の宣教の原動力となり、数えきれないほどのクリスチャンたちの人生を希望で満たしてきました。しかし、幾世代のクリスチャンが死んでもなお、この約束された出来事は起こっていません。多くの者たちが、私たちはどれだけ「イエスは再び来られる」と語り続けねばならないのか。これらの言葉は非現実的な期待を生んだだけなのかと問います(2ペト3:4参照)。

多くのクリスチャンたちが、この長い「遅れ」(マタ25:5と比較)についてつぶやいてきました。しかし私たちは、実際のところ、どのようにしてそれが長い「遅れ」だとわかるのでしょうか。キリストがおいでになる「正しい」時はいつだったのでしょうか。その時は50年前、150年前、それとも500年前だったのでしょうか。「ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです」(2ペト3:9)との聖書の約束はいったいどうなったのでしょうか。

イエスが昇天されてから幾世紀もの時が流れても、再臨の約束は今なお意味を持っています。なぜでしょうか。私たちにあるのは、この短い生涯(詩編90:10)、それに続く墓の中での無意識の休息(コヘ9:5、10)、そして最後の復活であり、その後に私たちの運命を変えるものは何もないのです(ヘブ9:27)。(第3課で学んだように)死者1人ひとりに関する限り、すべての死者は意識がない状態で眠っており、キリストの再臨の時は、死んだ後のわずかな一瞬ののちにすぎません。あなた個人について言えば(各時代のすべての神の民と同様に)、キリストの再臨の時は、あなたの死後、ほんのひと時ののちにすぎないのです。だとすれば、その時は間近だと言えないでしょうか。

1日過ぎるごとに、天の雲に乗って主イエス・キリストが栄光のうちにおいでになる日が1日近くなるのです。私たちには、主がおいでになる日が「いつ」であるかわかりませんが、私たちにとって真に重要なことは、主は必ず「来られる」ことです。

イエスはその奇跡の一つとして、ほんのわずかのパンと魚で5000人を養われました(ヨハ6:1~14)。群衆が彼を王に祭り上げようとするのを見て(同6:15)、イエスは弟子たちと共に船でガリラヤ湖の対岸に向かわれます。しかし翌日、群衆は彼を追って来ます。そこで彼は命のパンについて力強く語り、特に永遠の命の賜物について強調されました(同6:22~59)。

問3 ヨハネ6:26~51を読んでください。イエスはどのように、永遠の命の賜物と義人の終わりの日の復活を結びつけていますか。

説教の中でイエスは、永遠の命についての三つの基本的な概念を強調されました。第一に、彼はご自身を「天から降って来て、世に命を与える」(ヨハ6:33、58)パンにたとえます。「わたしは命のパンである」(同6:35、48)と宣言することによって、イエスをご自身を旧約聖書の偉大なる「わたしはある」(出3:14)という者として示されます。第二に、彼のうちに永遠の命があると説きます。「わたしのもとに来る者は、決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない」(ヨハ6:35)。そして最後に、イエスは不死の賜物を終わりの日の復活と結びつけ、聴衆に三度、「わたしがその人を終わりの日に復活させる」(同6:40、44、54)と保証されます。

イエスはまた、「はっきり言っておく。信じる者は永遠の命を得ている」(ヨハ6:47)との驚くべき約束をお与えになります。こうして、永遠の命の賜物はすでに現実のものとなりました。しかし、「その人を……復活させる」(同6:40)との御言葉通り、これは信じる者は死なないことを意味するものではありません。人が死んだ後によみがえることを前提としているのです。

その言わんとすることは明らかです。キリストによらずに、人は永遠の命を得ることはできません。しかし、キリストを受け入れ、永遠の命の保証を与えられた後も、私たちは死を免れることはできない存在であり、死すべき者です。再臨においてイエスは私たちを復活させ、その時に、すでに私たちが持っていた不死という賜物をくださるのです。この賜物の保証は、霊魂が無条件に生きることによるのではなく、イエスにある信仰によって与えられるイエスの義によるのです。

イエスを信じるなら、すでにあなたは永遠の命を得ている!というイエスの御言葉を心に刻みましょう。このすばらしい約束は、一時的とはいえ、現在の死という厳しい現実に対処するために、どのような助けとなるでしょうか。

テサロニケの人々は、再臨まで生き残る者たちだけに永遠の命が与えられると信じていました。「彼らは友人たちが死んで、主の来られるときに受けようとしている祝福を失うことのないようにと、友人たちの命を注意深く見守っていた。しかし、愛する人々が次々に彼らから取り去られた。そしてテサロニケ人たちは、亡くなった者たちの顔を、これが見納めと苦しみ嘆きながら見つめ、彼らと将来生きて会えるなどという希望は到底持てない気持ちになっていた」(『希望への光』1453ページ、『患難から栄光へ』上巻279、280ページ)。

問4 1テサロニケ4：13～18を読んでください。パウロはどのようにこの誤った考えを正していますか。

「イエスを信じて眠りについた人たちをも、イエスと一緒に導き出してください」(1テサ4：14)という表現の中に、この聖句が語る以上のことを読み込もうとする傾向が、歴史的にあります。靈魂の無条件の不死を信じる多くの人たちは、キリストはすでに天で神と共にいる死んだ義人たちの魂と共におられ、再臨の時に、それらの魂は復活したそれぞれの体とひとつになると主張します。しかしこのような解釈は、復活を扱ったパウロの教え全体と相反するものです。

ノン・アドベンチストの神学者が、この聖句の真の意味について書いています。「教会員の死を悲しんでいたテサロニケ教会の人々にとっての希望は、神が死んだ者たちを『導き出して』くださることである。それは、キリストの再臨を迎えるために、神が死んだ信者たちを復活させてくださることを意味し、そうして彼らが『主と共にいることになる』ことであった。死んだ信者たちが、キリストの再臨において何の不利も被らないよう、彼らがこのような方法で、生きて栄光のうちに主の再臨を迎える信者たちと同じ経験にあずかることを意味した」(ジェフリー・A・D・ウェア『テサロニケ人への手紙』319ページ、英文)。

もし死んだ義人の魂がすでに天で主と共にいるのであれば、パウロはクリスチャンの希望である終わりの日の復活に触れる必要はなかったのです。彼は、義人たちはすでに主と共にいるとだけ述べれば良かったはずですが、しかし、そうでなく、彼は「イエスを信じて眠りについた人たち」(1テサ4：14)は、終わりの時に死から復活すると言っています。

最後の復活の希望は、悲しみに暮れるテサロニケの人々に慰めをもたらしました。同じ希望は、死が私たちから愛する者たちを奪い、痛みを伴うとき、確信を持って死に立ち向かう助けとなるでしょう。

問5 1コリント 15:51~55 を読んでください。パウロはどんな「神秘」(1コリ 15:51) について語っていますか。

人気のある何人かの説教者たちは、この「神秘」(1コリ15:51) は、キリストの栄光ある再臨の7年前に起こる教会の「隠れた昇天」〔一般には「秘密携挙」と呼ばれる〕であると主張しています。この「隠れた昇天」によると、忠実なクリスチャンは、突然、音もなく、密かに天に連れ去られ、他の人々は、何が起こったのかと不思議に思いながら地上に留まります。人々は突然、運転手のいない車に乗っていることに気づくかもしれません。運転手が昇天したために、車中に「ただ衣服だけが残されている」のを見ます。この全16巻かならなる『レフト・ビハインド』シリーズは、ベストセラーとして4本の映画にもなり、数百万の人々に誤った教えを広めることになりました。

もちろん、このように再臨と昇天を分けることを支持する聖書の記述はありません。ここでパウロが述べている「神秘」とは、キリストの再臨の時に復活した義人たちに加わるために、生きている義人たちが変えられることを言っています。これが「昇天」であり「隠れた昇天」などは存在しません。すべての生きている人間は再臨を見る(黙1:7) のであり、キリストの再臨を知らせるラッパの音と共に、死人の復活と生きている者たちの栄化の両方が起こる(1コリ15:51、52) のです。

キリストの再臨は、かつてない驚くべき出会いをもたらします。生きている義人たちは、「一瞬のうちに」「今とは異なる状態に変えられます」(1コリ15:52、51)。神の御声が響くと彼らは栄化され、死なないものとなり、よみがえった聖徒たちと共に主に会うために空中に上げられます。「天使たちは、天の果てから果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める」(マタ24:31) のです。

「小さい子供たちは、天使たちに抱かれてきて、母親の腕に返される。長く死に別れていた友人たちは再会して、もう永久に別れることなく、喜びの歌をうたいながら、ともに神の都へと上っていく」(『希望への光』1914ページ、『各時代の大争闘』下巻425ページ)。

これほどの驚くべき約束は、私たちがかつて経験したこととはあまりに違うために理解できないほどです。しかし、宇宙の壮大さと地上の生命の考えられないほどの複雑さを考えてみてください。創造自体が神の驚くべき力を証しています。これらすべては、イエスの再臨の時に、生ける者を栄化し、死者を復活させる神の力について私たちに何を教えていますか。

参考資料として、『患難から栄光へ』第25章「テサロニケ教会への手紙」、第30章「競走に勝ち抜くために」を読んでください。

ステファン・ケイブは次のように書いています。「ローマ人たちは、死者はいつの日か肉体を持って墓からよみがえるという当時のクリスチャン信仰についてよく知っていたので、彼らの復活の希望をあざけり、妨害するためにありとあらゆる事をした。西暦紀元177年のガリアで起きた迫害の報告書は、殉教者たちはまず処刑され、次に彼らの死体は焼かれずに6日間埋葬もされず腐るに任せられ、焼かれた灰はローヌ川にまかれたあげく、ローマ人たちは、『さて、彼らがどうやってよみがえるか見てやろう』と言ったと記録している」（『不死——永遠に生きるための探求が文明をどのように発展させたか』104、105ページ、英文）。

これは神学的懐疑主義の一例にすぎませんが、聖書の復活の約束については何も証明していません。イエスをよみがえらせた御力は、私たちの体の状態によらず、私たちも同じようによみがえらせることができます。結論として、もしその同じ御力が全宇宙を創造し、支えておられるとすれば、神は確かに生ける者を栄化し、死者を復活させることができになるのです。

「『同様に神はイエスにあって眠っている人々をも、イエスと一緒に導き出して下さる』とパウロは書いた。多くの人がこの聖句を、眠っている人々が天からキリストとともに連れてこられるという意味に解釈しているが、パウロの言う意味は、キリストが死からよみがえられたように、神は眠っている聖徒を墓から呼び出し、キリストと一緒に天に連れて行かれるということであった。これはテサロニケの教会ばかりでなく、どこにしようとも、すべてのクリスチャンに与えられた慰めであり、輝かしい希望である」（『希望への光』1454ページ、『患難から栄光へ』上巻281ページ）。

話し合いのための質問

- ① 私たちは、完全に向かって成長すること（フィリ3：12～16）と、キリストの再臨の時にのみ私たちは朽ちず、罪のない性質を受けるという事実（1コリ15：50～55）をどのように調和させることができるでしょうか。
- ② 再度、1コリント15：12～19を読んでください。これらの聖句は、死者はイエスと共に天にいるという考えに対して、彼らは眠っているのだとする考えを、どのように支持していますか。もし死んだ義人が、今天でイエスと共にいるのなら、これらの聖句にはどんな意味があるでしょうか。